

岩井芳生

(富山県東部教育事務所)

私が住む黒部市と北方領土との関係はとても深く、黒部市生地には元島民の方たちやその家族が多く住んでいる。かつて、黒部市立生地小学校在職中に元島民の方をお呼びして子どもたち、保護者に北方領土についてお話しをしていただいたこともある。黒部市は、北方領土の問題について意識の高いところである。黒部市在住の自分が、今回の訪問で実際に国後島にわたり、北方領土についての見識を広めることができたことは、大変有意義であった。平成20年度北方四島交流教育関係者・青少年訪問事業への参加という貴重な体験の機会をいただいたことに感謝したい。

多くの行程の中から、心に残ったことを簡単にまとめてみた。

1 根室市の印象

富山から飛行機を乗り継いでようやく根室市に着くと、まず目に入ったのは「北方領土返還」の大きなモニュメントや看板などである。根室市民の北方領土返還にける思いは言葉に言い尽くせないものがあると感じた。元島民が多く住み、歯舞諸島や国後島が泳いでわたることができるほどによく見える根室の人たちにとっては、我が国の領土にもかかわらずロシアに占有されていることが耐え難いことなのだと想像できた。



2 国後島の状況

根室港から約4時間、古釜布湾に着いた。舩に移り、入域手続きを行った。霧で島の全体像がよく見えなかった。気温は低く、半そででは肌寒さを感じた。島の自然は北海道、特に、根室半島とよく似ているように思われた。大きな藪が雑草のように生え、はまなすなども見られ、植生がそっくりであった。



車で「友好の家」まで送ってもらったが、大変な悪路



であった。アスファルトで舗装された道はなかった。しかも、デコボコ道で、車から降りてもフラフラするくらいであった。送迎の車は、どの車も日本の4WDであった。4WDでないと国後の道には到底対応できなと感じた。

島の住民は当然ロシア人である。国後逗留期間すべて同じ車で移動したが、気さくなロシア人女性で、いろいろ気を配ってくれた。

3泊4日であったが、天候はほとんど曇り、そして、霧。最後の日だけ羅臼山をまとも

に拝むことができた。話を聞くと千島海流の影響で霧の日が多く、秋口くらいにようやく



天候がよくなると聞いた。4日目にようやく島全体が見渡せたが、国後島は大変広い島であり、羅臼山などもある火山島であるということが自分の目で確認できた。面積は沖縄本島より広い。

3～4階建てのアパートのような建物が多くたっていたが、どの建物も大変古く、修繕されたような痕跡もなかった。住宅事情もよいとは思えなかった。

ただ、釣りをしている人の様子を見てみるとすぐに大きなカレイやマスなどを釣り上げていた。そこからも水産資源の豊富さをうかがい知ることができた。

幸い「友好の家」で宿泊することができ、シャワー、水洗トイレ等も完備され、ほぼ快適に過ごすことができた。

3 ホームビジット

期待と不安の入り混じった気持ちでホームビジットに向かった。私の所属するグループではロシア語がだれ一人できず、どんな方の家に行くかもわからない。(名前だけは知らせてもらっていた)ところが、迎えてくれたのは妙齢の美しい女性であった。食卓にはウオッカ、ビール、ワイン、さらにかになど山のご馳走が並んでいた。また、その女性、アンドロニクさんは、日本語が話せた。日本に何回か行ったことがあるばかりでなく、札幌で日本語の勉強をした経験があるそうである。とても親日的で、温かい人柄の方であった。



ウオッカはアルコール度約40%であり、乾杯は全部グラスを空けなければならない。大変なルールではあるが、とても楽しかった。片言ではあるがロシア語会話集を片手に少しずつコミュニケーションを図ることができた。アンドロニクさんの友達のマリナさんも途中から加わり、アルコールの助けもあり、言葉が十分通じなくても、心は十分通じ合えたように思う。

アンドロニクさんは、43歳とのことであったが、もう4歳のお孫さんがいて、とてもかわいがっているとのことであった。ロシア人は、早婚が多く、また最近離婚率も高いと聞いた。

国後島の人たちが全員そうだとはいえないが、とても親日的で、日本への憧れを抱いているように感じた。

領土の問題は、日本政府とロシア政府との交渉に待たなければならないが、民間の交流が根底になればロシア国民の世論に訴えることもできない。日本が粘り強く北方領土の返還交渉を続けていくとともに、日本の国民が北方領土の現状を理解し、ロシアとの交流を深めていくことも大切であると痛感した。

4 対話集会

今回の対話集会では、日本の教科書を紹介し、日本がどのように北方領土のことを小中学生に教えているか紹介した。パワーポイントを使い、大変わかりやすい発表であった。日本でどのように北方領土が教えられているか実際の教科書を持ち込んでの具体的な説明にロシア側もその事実についての認識がなされたと思う。少しずつではあるが、相互理解が深まっているように感じた。



5 東沸・古釜布墓地墓参

二箇所の墓地の墓参では、あらためてかって日本人がこの国後島に住み、生活し、そして、亡くなった人がおられたということを偲ぶことができた。墓地はきれいに草が刈られていた。そこで線香を立て、墓参りをすることができた。そこに眠る人たちは今の国後の状況を空の上からどう思っているのだろうか。



前述のほか幼稚園、小中学校の視察、郷土史博物館、中央図書館の見学、材木岩の見学など過密なスケジュールではあったがどれも印象深く、日本と北方領土との



の関係を考えさせられるものであった。この経験を、また、この気持ちを機会があれば教育関係者だけでなく多くの人と共有することができたら、私の国後島訪問もさらに意義のあるものになると思う。



最後に、北方領土問題対策協議会ほか、お世話いただいた皆様に心から感謝したい。

